

地域活性化という「遊び」

35

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

み

わ・ダツシュ村のある京都市
三和町の冬は寒いです。

寒いですがウインタースポーツが
きるほど雪は降りません。

雪かきの手間を考えると

積雪が少ないことは

とてもありがたいのですが

遊びの面から見ると



屠殺時、大量に飛び散る血液。
山では地面に染み込むのでもっと少なく見えます。

雪がないということは寒いだけで
何もないということになり

普段から何もないと言われる集落の
何もない感がどっと増し

訪れる人も激減します。

しかし今年は新年早々

その寒いだけで何もない集落に

京都市や三重県、遠くは香川県から

10人の子供たちが集まってきました。

集まった子供たちは12歳から18歳。

我が家と同じように

遊びイコール学びと考える子育てを

実践する家族の子たちで

子供同士で連絡を取り合いながら

いろんな場所でテーマを決めながら

集まっています。

今回のテーマはジビエ。

うちの子たちが

元旦に生け捕った鹿で

子供たちが真剣なジビエ遊び

料理を学びながら
食材という面から

狩猟を手伝うようになり

それをSNSなどで見た子供たちが

自分たちでもやってみたくて志願し

てきたのです。

獲物を捕って屠殺して解体とな
ると最低でも3日

じっくりやろうとすると

5日はかかります。

カフェは作ったのですが

まだ宿泊棟はありません。

季節が良ければ畑の片隅にテント張

って寝ろ！で十分なのですが

さすがにこの季節

一度は断りました。

しかしどうしてもという情熱に負け

ついにOKを出してしまいました。

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかわらオーガニックレストランを運営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。



屠殺の瞬間、さすがに凍りつく子供たち。

倉庫の中にテントを張って

みんなでペンギンのように暖め合っ

て寝るそうです。

さて、そんなこんなで

正月休みもそこそこに

1月4日から来るのが決まって

こちらとしては肝心の獲物がかかる

のかと心配したのですが

なんと元旦に

大きなオス鹿がかかりました。



教えてもらいながら真剣に取り組む少年。彼はまだ中学3年生。



あまりの寒さに手がかじかんで内臓を取り出す際思わず温かーいと叫んだ18歳の女の子。



ここまでくるとやっと食べ物に見えてくる。



肋（骨付きバラ肉）はオーブンで焼きました。その美味しさにみんな感動。

オス鹿はツノがあるため生け捕りは困難を極めます。年末に一度挑戦したのですが危険すぎると判断し途中で諦め山で屠殺しました。しかし今回生け捕りを諦めると彼らが屠殺の現場を見学する機会を逃してしまいただ寒いだけで何もないところまでわざわざやってくる値打ちが半減するような気がしてオス鹿の生け捕りに再挑戦。二日にわたって慎重にツノを切り脚を縛って何とか捕らえました。

屠 殺の瞬間
大量の血液に複雑そうな表情を浮かべた若者たち。内臓から立ち上る湯気や冷えた手を温めるほどの血液の温度に何を感じたでしょうか？ ショックで捌いた肉を食べられない子が出るかと心配もしましたが

そんな心配どこ吹く風。生き物に興味のある子は出したばかりの内臓を切り分けて細かく観察したり写真に興味のある子は解体に向き合う子たちの表情を撮影したり料理に興味のある子は解体の方法でうちの子たちを質問攻めにしたりととても充実した時間を過ごしています。これから1週間ステーキ、焼肉、ハンバーガー、骨からとったスープでラーメンと自分たちの力で勝ち取った自然の恵みをとことん味わう予定。おかげで正月休みはどこかへ行ってしまうけれど寒いだけで何もないと思っていた限界集落にこんなに楽しく真剣に遊びながら学べる授業ができたことは僕にとって最高の遊びです！